



氷ができるかな

副園長 本橋 房子

今年は、例年よりも早く園庭の梅の花が満開になり、辺りには花のよい香りが漂っています。その様子から春が近いかと思いきや、1月下旬には東京でも氷点下になる日が数日ありました。

ある朝、教師がタライに汲んでおいた水が凍っていました。氷に気付いた子どもたちは、歓声を上げ目を輝かせながら氷を手に取り、走って教師や友達に見せに来ました。また、花壇では凍った土の中でキラキラ光る霜柱を見つけて、友達と一緒にいろいろな場所を掘ってみる姿もありました。

4歳児は、自然にできた氷を初めて見る子どもも多く、手に取った氷の透明感や太陽に当たって光る様子に「きれい!」「とっておきたい」と言って大騒ぎ。その後、手が赤くなるまで氷を持って眺めている子や、ままごとに使って遊ぶ子もいました。その中に、みんなが氷を触る様子を見てはいるものの、氷に触れようとしない子がいました。教師が誘うと「冷たいから触らない」と言っていました。翌日には自分から氷に触れて「冷たいね」と教師に伝えていました。気になっていても動き出すタイミングは、それぞれ違うということです。

5歳児では、氷が初めてできた翌日には、登園後に池の水やタライの水が凍ったかどうか確認する姿が見られ、その日も氷を見つけたことをきっかけに「氷研究所」が始まりました。「お花が入った氷を作りたい」とタライの水に花びらを浮かべる子、タライの水に棒を挿し入れ「棒が抜けなければ凍ったということ」と考える子、太陽が当たると溶けてしまうからと水を入れたタライにふたをする子など、「こんな風に氷を作りたい」「こうしたらきっと氷ができる」と自分なりに考えて、イメージしたように氷ができることを楽しみにしていました。

あくる朝、期待しながら自分が置いたタライを見に行ったら凍っていません。すると、前に氷ができていた『くぬぎの庭』へと向かう幼児がいました。その日陰では、この日も氷ができていました。そして、「こっちは暗いから(日陰)」「風が冷たくて寒いから」と呟きながら、その氷を持ってきて凍っていない自分のタライに入れていました。「氷を入れておいたら凍るかもしれない」と考えたそうですが、しばらくしても凍りません。その日、子どもたちは『くぬぎの庭』にも水の入ったタライやバケツを置いて帰りました。

特に自然には、子どもたちが「不思議だな」「なんでだろう」と感じるものがたくさんあります。その中で、幼児は自分なりに考え、試行錯誤しながら関わり、自分なりの気付きや新たな考えをもちます。そのような過程で探究心が育まれます。そしてこの体験の一つ一つが、自分で考えて行動する力、様々なことに関心をもち意欲的に取り組む力につながります。

私たち教師は、幼児がしてみたくなるように環境を整え、じっくりと関われる時間や場所を保障し、幼児の考えに共感したり、考えを引き出したりしながら、幼児なりに試行錯誤する楽しさを感じられるよう支えています。自分で考え、試すおもしろさを知ることは、実際には自分の考えたようにいかなくても、次はこうしてみようと思う心を育むと考えます。今は知りたいことは簡単に調べることができるような時代ですが、大人が先回りせず幼児の自由で豊かな発想に耳を傾け、「どうかな?」「そうかもしれないね」等と共に思いを巡らし、幼児が思ったことを試せる経験が重ねられるようにしていくことを大事にしたいと思います。

— 今月の指導のめあて —

- < 4歳児 >
 - ・ 気の合う友達と一緒に遊ぶ中で、自分の思いを言葉にしたり、相手の思いを受け止めたりする。
 - ・ 学級全体でする活動を楽しむ中で、友達とのつながりを感じる。
 - ・ 年長児との関わりを通して親しみを感じ、あこがれや感謝の気持ちをもつ。
- < 5歳児 >
 - ・ 自分のめあてをもってあきらめずに挑戦し、試行錯誤しながら、達成感や満足感を味わう。
 - ・ 友達と一緒に生活や遊びを進める中で、自分の思いだけでなく、相手のことも考えながら行動しようとする。
 - ・ 園生活を振り返り、自分の成長を感じる。